

第2回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会 議事録概要版

【テーマ】2050年の浦和の将来像・コンセプト

【開催日】令和3年11月2日（火）14:50～16:00

【参加者】隈研吾会長、安藤梢委員、市川淳平委員、坂井貴文委員、田口裕基委員、鳥羽三男委員、廣瀬通孝委員、向井亜紀委員、安河内眞美委員、清水勇人座長

（清水座長）

- 8月28日した第1回懇話会では、「2050年に浦和が目指すまちづくりとは」をテーマとして、委員の皆様から魅力や価値について大変貴重な意見あるいは提案をいただいた。
- 本日のテーマは、2050年の浦和の将来像コンセプト。第1回懇話会でいただいた意見、キーワード、考え方などをもとに市で整理した概要を、まちづくりニュースレターの3ページ、4ページに整理した。第1回懇話会でいただいた意見を振り返りながら、委員の皆様のご専門を中心に様々なご意見、ご提案をいただきたい

【意見概要】

（隈会長）

- 駅周辺は交通をさばく機能だけではなく、どのようにまちのアイデンティティを作れるかが重要。
- さいたま市は4つのまちが合併したまちだが、それぞれのキャラクターが残るデザインができると良い。
- 文化とまちをどのようにつなげていくか。人が多く建物が多いことが立派なまちではなく、文化とまちづくりの融合が重要なテーマである。

（安河内委員）

- 教育の場で日本の美術を学ぶことが、日本人としての誇りにつながるものとする。
- 日本の美術に興味を持つ方々はシニア世代が多い。そのため、シニア世代が大学等で芸術について学べる環境があると良い。
- 中山道のまち歩きをしているが、旧道の街並みには人間らしさを感じる。
- デジタルテクノロジーを活用し、昔の中山道をデジタルで体験できるようなものがあったら面白いのではないかなと思う。

（坂井委員）

- 文教都市のイメージは簡単に作ることができず、他都市と差別化を図る貴重な財産、浦和の強みとして活かすべきである。
- 小中高の教育レベルの維持・発展はもちろんのこと、人生100年時代の新たな魅力として、新技術を取り入れたリカレント教育やリスキリング教育の推進が必要。
- 生涯学び、成長を続け、自己実現できるまちづくりが必要。

- 交通利便性や大学・企業があることなど、新たな知の創造を可能にするポテンシャルを活かし、例えば先進研究機能を持つ都市といった顔を持つことができれば、グローバルな研究者や学生たちが集まるまちとして、新たな学術の発信拠点となることもできる。
現庁舎地の活用にあたり、浦和の教育の歴史を踏まえつつ、文化芸術や市民交流の場としての機能に加え、教育先進研究を行えるような機能が付加できれば、新たな魅力になると考える。

(安藤委員)

- 10年くらい浦和レッズでプレーさせてもらっているが、選手として、日本一のサポーターの前でプレーできることを誇らしく感じている。また、他チームからもうらやましがられる。ドイツでも「浦和レッズ」は有名であり、世界レベルでアピールできる強み。
- スポーツを通じて、人々が一体となり、大きなエネルギーがまちに生み出される。
- 地元のスポーツクラブを地域の女性や子ども達、高齢者等が安心して見ることができ、応援できる環境があると良い。
- スポーツの関わり方に「する、みる、支える」の3つがあるが、それぞれの立場でコミュニティ活動が展開できる場や機会があると良い。
- スポーツを通じて、生き生きと、幸せを感じられるまちになると良い。

(廣瀬委員)

- デジタルツインの役割は大きく2つあり、①災害時でも活動を止めない救命ポートとしての機能と、②世の中を活性化する第2の空間、フロンティアとしての機能。
- リアルとサイバーの融合は、既に我々の生活にも実装されており、ネット販売やブログ、リモートワークなどが該当する。SNS等は災害時に役に立ち、情報が早い。
- 情報的な空間を「メタバース空間」という呼び方をする場合がある。フロンティアという意味でいえば若者もここに集まるので、活気にあふれた浦和を作るうえでこういうことを考えていく必要がある。
- 細かいところまで対応できるのが情報技術の特徴であり、バーチャルな店舗はリアルな店舗よりはるかに細かい品ぞろえが可能といったことがある。また、高齢化社会で外に出られない問題に対し、情報を使うと在宅をベースとした新しい住まい方が可能になるということもある。
- 情報技術は時間軸を行ったり来たりが簡単にできるので、過去の浦和をみながら楽しいまち歩きができることなど、色々なものを企画していくことができる。2050年に向け、情報技術をしっかり消化し、浦和のまちの中に定着させていくことが重要と考える。

(向井委員)

- 浦和は文化のまちと言われるだけあり、老若男女が心柔らかない部分があり、レッズの文化をしっかりと飲み込んでいる。試合の日には、多種多様な人々が1つのスタジアムに集まるといった文化が浦和だからこそ根付いた。
- 「文化」というのは、難しく考える必要はない。「文化」とは愛着とか懐かしい、また行きたい、大好きなど、ぱっと思い出したときに心がふれば、心に浦和という文化が根付いているということだと思う。
- 目を閉じて胸の印画紙に焼き付いているような景色が、浦和に作れるのかを一つのコンセプト

にして、元気が出るような、解放されるような景色ができてほしい。

- 浦和のまちは、無理せず自分でいられる場所、自分を解放できる場所になってほしいと思う。
- まち自体が一つの家・家族となり、物事を様々な人と手分けして支え合うことができれば、浦和はパワーアップすると思う。

(市川委員)

- 浦和駅周辺の流れ・回遊性について、昼間は駅からコルソ、中山道、イトーヨーカドーと商店街の小さい四角の中で完結している。朝は駅から官庁街へ行く流れであり、夕方は住民と働く人々が入れ混じっている印象である。まちづくりにもこういった人の流れ・回遊性の違いを考慮すべきである。
- 水辺の整備もまちづくりの1つのポイント。3つの親水空間（別所沼公園、埼玉近代美術館、白幡沼）について、それぞれ遊歩道で整備されているが、もっとウォークアブルに整備し、更に身近な散歩道にした方が良い。
- まちは安心安全が第一。防災・交通・防犯など多角的な視野での安心安全が必要。今後もマンション建設が続き、子育て世代の流入が続くので、子育て世代にとっての安心・安全が重要。
- 新旧住民のコミュニティ形成について、マンション内の商店街と居住者が協力してお祭りを開催している所があり、感銘を受けた。これからの浦和のまちの有り様のヒントになるのではないか。

(田口委員)

- 浦和は観光客ではなく、上質な生活者というのがまちの主役。生活者としての皆様と一緒にこのまちを盛り上げていくことが大切。
- 浦和の方々には、色々なライフスタイルに合わせたインフラを整えた、今後の商業施設が大事になってくる。
- コロナ禍を経験したが、リアル空間のショッピングは、今後も不可欠であると思う。
- 2050年は駅周辺の建物が更新を迎える時期であり、様々な機能を建物に入れようとする現在の床面積では足りなくなるため、浦和なりの建築基準の緩和の方法として、浦和ルールがあるとよい。浦和ルールで、賑わい、安心安全、教育子育て、そして行政サービス等の機能が集約され利便性のある商業施設があり、そこから歩いて住宅地に行くようなまちづくり、上質な生活者のためのまちづくりを今後一緒に考えていきたい。

(鳥羽委員)

- 災害時には、駅周辺は、駅を利用するお客様をはじめ、様々な方々が滞留することが想定されるため、避難環境の整備が必要である。
- 「浦和のまちならば安全だ」といえるようなまちづくりが必要。
- また、駅を中心にウォークアブルな歩きやすい空間を整備し、“集う”駅から“つながる”駅になっていくと良い。駅は不特定多数の人が使うため、そこからまちの魅力など様々な情報を発信していきたいと考えている。

(向井委員)

- 隈会長にお聞きしたい。2050年に向けて、様々な技術革新が進み、移動手段や生活スタイルが変わる中で、これまでの道や駅の役割はどうなっていくのか？

(隈会長)

- かつて駅ができた頃は、そのまちを象徴するものであったが、20世紀以降は通勤に使う場所として、マイナスなイメージにすらなっている。しかし近年はウォークブルの起点として見直され、駅周辺のまちづくりが再熱している。
- 駅周辺の期待値は高く、変わらなければならない。交通の手段は自動運転など検証の段階であり、この30年間でかなりのことが起きるので、今後、駅周辺に一番面白いことが起きてくるのではないかと考えている。
- 「デザイン」と「技術」をうまく噛み合わせていくことが必要と考える。

【総括】

(隈会長)

- 本懇話会は、まちづくりの専門家だけではなく、様々な分野の方が入っているため非常に面白い。
- 浦和は多角的な深さ、色々なものが複合している深さを持っているので、多角的な視点でまちを見る必要がある。
- 多面的な視点からの意見を反映していけば、深さのある計画が出来上がると考える。

(清水座長)

- 委員の皆さんからの様々なご意見を踏まえ、個性と魅力を磨き上げながら2050年に世界で輝く浦和を目指し、今後、市民の皆さんからもご意見を伺いながらまちづくりビジョンの検討を進めてまいりたい。
- 様々なヒントを委員の皆さんから沢山いただいたので、それらを踏まえながら、さらに計画づくりを深めていきたい。

以上